和泉式部の墳墓

林田　孝和

和泉式部の歌

國學院大學創立百周年記念事業の一つとして「日本民俗研究大系」全十巻が編まれ、昭和五十七年九月から平成三年六月にかけて國學院大學から発行された。昭和五十年代は、民俗学関係の講座や大系の出版が全盛のころで、「日本民俗学の視点」高崎正秀、池田弥三郎、牧田茂編、全三巻（日本書籍、昭和五十一年）、「講座日本の民俗」井口章次、本多安次、三谷栄一他編、全九巻別巻一巻（有精堂、昭和五十三～七年）、「日本民俗学講座」和歌森太郎編、全五巻（朝倉書店、昭和五十一年）、「講座日本の民俗宗教」五来重、桜井徳太郎、大島建彦、宮田登編、全七巻（弘文堂、昭和五十四～五年）、「仏教民俗学大系」桜井徳太郎他編、全十巻（名著出版会 昭和六十一年～平成四年）などが発行されている。

「日本民俗研究大系」は第一巻「研究史と方法論」、二巻「信仰伝承」、三巻「周期伝承」、四巻「老少伝承」、五巻「造形伝承」、六巻「芸能伝承」、七巻「言語伝承」、八巻「心意伝承」、九巻「文学と民俗学」、十巻「国学

と民俗学」に構成され、わたしには第九巻に所収する「和泉式部と口承文芸」（平成元年三月刊）というテーマが与えられた。正直にいって、それまで式部の作品はそれほど真剣に読み込んでいなかった。書けるかどうか戸惑いを感じながらも、せっかくのチャンスなので引き受け、彼女の全作品を読むことにした。

和泉式部の歌は勅撰和歌集に二百四十六首（二百二十二首、二百四十七首説もある）採られ、『和泉式部日記』に百四十七首（うち七十一首は帥宮の歌）、『和泉式部集』「正集」（定家・民部卿局筆本）八百九十三首、「続集」（丹鶴叢書本）に六百四十七首、宸翰本に百五十首、以上二千数百首がある。その「中には贈答歌の相手方の歌も入っており、他の歌も誤り入っているほかに、和泉式部歌の重出歌も多数含まれているから、その重複を整理するならば和泉式部歌は大体一五〇〇首前後となる」[1]。『和泉式部日記』はともかく、『和泉式部集』「正集」「続集」にいたっては、信頼できる本文も清水文雄氏校注の岩波文庫だけで、注釈書らしい注釈書もなかった。しかも説話や伝説類も取り込まなければならないので、かなりの時間と忍耐を要する仕事であった。だが脱稿してみると、彼女の人間的な新生面も多く発見することができたことに、ある種の満足感を覚えた。

その一生

和泉式部の閲歴は、王朝の女性たちのなかでは比較的はっきりしているほうである。父は越前守大江雅致（まさむね）、母は越中守平保衡（やすひら）の女。父の弟匡衡（まさひら）の妻が赤染衛門。長徳ごろ（九九五～九）二十歳前後に橘道貞（三十七歳、一説に三十歳）と結婚、翌年小式部が生まれる。道貞は長保元年（九九九）二月和泉守となり、式部も一時的に和泉国に下向した。道貞の女性関係のいざこざから道貞邸を去り、長保三年ごろ、冷泉天皇第三皇子・弾正宮為尊（ためたか）親王と恋におち親に勘当される。だが、その恋も親王の病死によって、一年半余りで終わる。親王死後一年も経たないうちに、異母弟・帥宮敦道（あつみち）親王の愛を受け、親王邸に入居する。その帥宮も寛弘四年（一〇〇七）十月、一子（石蔵の宮、出家して永覚を名告る）を残して死去、二人の同棲生活はわずか四年半であった。寛弘六年（一〇〇九）四月ごろ

中宮彰子に仕え、翌七年藤原道長の家司藤原保昌と結婚、晩年は保昌の庇護のもと平穏な日々を過ごしたようである。

和泉式部は、橘道貞の妻でありながら、ほぼ同年輩の弾正宮為尊親王と恋におち、その死後一年も経たないうちに異母弟・帥宮敦道親王と関係を結ぶ。こうした閲歴から、永く奔放な愛に身を置く〈うかれ女〉、俗にいう〈浮気女〉〈尻軽女〉とみなされてきたが、彼女の詠み残した千五百余首の歌によって、こうした見方は近年訂正されつつある。次に具体的に一例だけておこう。

道貞との離別の原因は、彼女の一方的な非によるものではなかった。その直因は夫・道貞の心変わりにあったことが『和泉式部集・和泉式部続集』（清水文雄校注、岩波文庫）から読み取れる。

陸奥国へいひやる

高かりし波によそへてその国にありてふ山をいかに見るらむ　（九一〇）

寛弘元年（一〇〇四）三月道貞は陸奥国守として赴任したが、式部を同道しなかった。そのさい式部が陸奥にいる道貞のところに贈ったのが、この歌である。「高かりし波」は道貞の激しかった浮気の比喩。その本命は左京命婦で、道貞は下向半年後の閏九月十六日に任地に呼び寄せている。子供までなした女性であった。しかし薄情な夫への想いは変わらなかった。

みちのくにの守にて立つを聞きて

もろともに立たましものを陸奥の衣の関をよそに聞くかな　（八四七）

去りたる男の、遠き国へゆくを、「いかが聞く」といふ人に

別れても同じ都にありしかばいとこのたびの心地やはせし　（一八四、八四九）

式部は、ともに陸奥に下りたいと願っても叶わないこと、たとえ別れてもせめて同じ都の内にいてくれたら、とその抑えがたい想いを漏らしている。道貞が和泉式部を断固として同道しなかったのである。彼女を〈うかれ女〉〈すきもの〉と一括りにすべきでないことは別に述べた。[2]

和泉式部の墳墓の地

和泉式部伝説の分類を最初に試みたのは、藤沢衛彦氏であった。藤沢氏は、(1)腰掛松腰掛石系統、(2)徘徊旧跡系統、(3)式部塚系統の三系統に分類された[3]。ここでは行文の関係で、式部の墳墓の地と伝える(3)式部塚系統のみを採り上げる。墳墓とは墓・塔・塚・廟の類をいう。なお＊印をつけた文献は、わたしが補遺したものである。

一　京都寺町通六角蛸薬師間西側式部小路誠心院一名和泉式部寺（『京都坊目誌』『京童*』『東京道名所記』『京雀*』『雍州府志*』）

二　京都一条京極誓願寺内東北院（『扶桑記勝』『雍州府志』『東北院*縁起』）

三　京都下立売通極楽橋西詰池上の法妙寺旧跡槲の木立つ処（『山城名跡巡行志』）

四　山城国相楽郡木津渡東南一町余和泉式部の墓（『山城名跡巡行志』『山州名跡志*』『都名所図会*』）

五　伊勢国度会郡前谷村大字亀谷（『伊勢名勝志』『宮川夜話*』『勢陽五鈴遺響*』）

六　五を後に移したる伊勢山田吹上町光明寺旧蹟（『宮川夜話』）

七　伊勢国古市久世戸の阪側（『伊勢参宮名所図会』）

八　播磨国加古川村供養塔（『有馬山温泉記』『一宮巡詣記抄』『椎の葉*』『播磨名所巡覧図絵』）

九　紀伊国東牟婁郡三里村大字伏拝（ふしおがみ）供養塔（『紀伊国続風土記』『その浜ゆふ*』『去峰集』）

一〇　陸中国和賀郡横川目村大字同式部塚（『和賀稗貫二郡志』）

一一　安房国那古町那古寺（『房総雑記』『百首正解』『めかりの日記*』『千葉古事志』）

一二　安房国平群郡米沢村（『めかりの日記』）

一三　安房国平群郡九重村大字竹原（行カ）（『安房志』）

一四　日向国児湯郡都於郡（とおこおり）村大字鹿野田氷室山の腰式部塚（『式部由来記』『三国名勝図会*』）

一五　美濃国可児（かに）郡井尻（いのじり）村式部塚（『濃陽志略*』『美濃明細記』『新撰美濃志*』『木曾路名所図会』）

一六　摂津国豊山（嶋カ）郡古江村無二菴（むにあん）供養塔（『摂陽群談』『摂津名所図会*』）

一七　丹後国天橋立切戸の文珠堂式部塔（『宮津志』）
一八　丹後国多紀郡幸原村（『温故随筆』）

和泉式部の墳墓の地は、ほぼ全国的に分布するが、藤沢氏は右の十八例、池田亀鑑氏は十七例[4]、岡田希雄氏は十九例[5]、式部の伝説の地を精力的に踏査を続けられた吉田幸一氏は三十例余り[6]をあげられる。これらに手持ちの資料を加えて、次に藤沢論文を追補する。

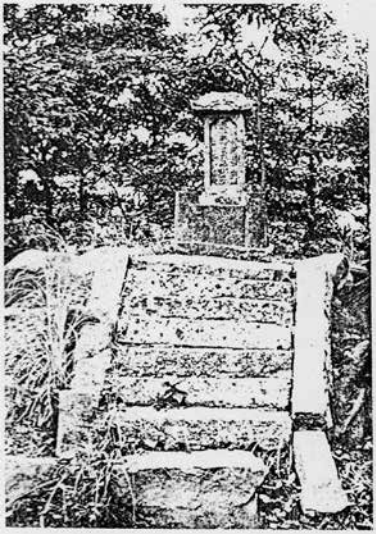
一九　福島県白河郡石川駅中郷　和泉式部墓（『奥羽観蹟聞老志』）
二〇　栃木県下都賀郡南犬飼村大字中泉　和泉式部墓（『栃木県史』）
二一　静岡県駿東郡八―六八新芝（あらしば）円通寺　和泉式部古墳（『駿河志料』）
二二　長野県諏訪上原（かみのはら）村　和泉式部廟（『一宮巡詣記』）
二三　京都府葛野郡双丘南　和泉式部塚（『山州名跡志』『山城名跡巡行志』）
二四　京都府葛野郡太秦領内　和泉式部塚（『山州名跡志』『太秦村誌』）
二五　京都府山中村　和泉式部墓（『宮津府誌』『丹哥府誌』）
二六　京都府船井郡大字中台小字桜梅　和泉式部墓（『船井郡志』）
二七　大阪府堺市戎町の東の天神社（郷社菅原神社で威徳山常楽寺と号す）　和泉式部塔（『和泉名所図会』『堺市史』）
二八　大阪府堺市平岡町四〇〇　式部墓（『和泉志』『泉北史蹟志料』）
二九　大阪府泉南郡南掃守村神松村　式部塚（『泉州志』『和泉名所図会』）
三〇　兵庫県川辺郡伊丹坂辻村　和泉式部塔（『摂津名所図会』）
三一　兵庫県雨内村（若狭野）から一里ばかり西、与野村の東　和泉式部の墓（『播州古跡便覧』）
三二　広島県尾道の向い側にある向島の歌浦西金寺山　和泉式部墓（『向島岩手島史』）
三三　高知県幡多郡伊佐村足摺岬の金剛福寺の鐘楼堂の東脇　和泉式部墓（『土佐国州郡志』『南路志』）

三　宮崎県諸県郡深歳村の真金山法華嶽寺　身投岡・式部谷（『太宰管内志』）

和泉式部の墳墓の地は、全国三十数か所に認められるのである。彼女の出生・生誕の地も、北は岩手県和賀郡から南は佐賀県杵島郡にかけて伝承されている。(1)腰掛松腰掛石系統・(2)徘徊旧跡系統や中世説話・御伽草子などにみえるさまざまな和泉式部説話、それに詳細な参考文献などは前掲「和泉式部と口承文芸」にあげておいた。

長門国の和泉式部の墓

たしか平成元年の中古文学会秋季大会（於・愛知淑徳短期大学、十月二十一日）の会場であったと思う。和泉式部研究の第一人者であった森田兼吉氏にお会いした。拙稿のことが話題になり、山口県にも和泉式部の墓がある。資料を差し上げましょう、お任せします、とのことであった。十二月に「和泉式部の墓」[7]と題する調査・報告のコピーが届いた。「あたたかな冬で今日も快い日差しがあふれています　お約束しながら　おそくなりました　ご参考になれば幸いです　私は怠慢で　学生と見には行くのですが　まったく調べていないで……」との手紙（89・12・04消印）が添えてあった。


和泉式部の墓（小埴生）

長門国の和泉式部の墓は、山口県厚狭（あさ）郡山陽町（新地名、山陽小野田市）にある。山陽本線埴生（はぶ）駅を下車すると、左手の海側に周囲数十メートルほどの老松の茂った丘がある。この丘に和泉式部の墓、小式部の産湯の石と伝えられるものがある。

墳はほぼ南北に細長い丘状をなし、南側傾斜面

の草むらを分けて上ると、丘上に一段高く盛土され、石段を構えた一基の墓があって、傘石を覆い、その仏石の正面に「尊霊和泉式部御墓」左右に「享保十六年戌」（一七三一）「奉寄進当邑中」と刻まれている。そこからものの十mも離れた丘上平地の南端には横九八cm、縦一一七cm、厚さ一七cmの沓ぬぎ石に似た平盤な石があり、式部の娘、小式部内侍が産湯をつかった石と伝えられている。

このほか『社寺由来』土生（はぶ）村八幡の項に、「阿子根の松原」と呼ぶことについて、「この八幡社の前の松原を阿子根の松原といって、昔、和泉式部が此の松原で安産されたので、その時分から阿子根の松原と申し伝えている」と、享保十三年（一七二八）十一月八日に、この八幡社の神主であった渡辺六郎左衛門から届け出があったと記す。天保十二年（一八四一）、各代官所からの報告をまとめて作られた『風土注進案』土生浦の項には、「産湯の井戸」「産湯の岩」などの小式部出産と係わる伝承も記している。江戸時代初期から、ここ土生（埴生）の地に和泉式部伝説があったのである。彼女の墳墓の地として、

三五　山口県厚狭（あさ）郡山陽町（新地名、山陽小野田市）和泉式部御墓（「山陽史話」第一輯）

を追補しておきたい。森田兼吉氏は平成十六年七月二十九日にご逝去、資料をいただいて二十九年ぶりにここに報告できることを、自身の怠惰を反省しつつも嬉しく思う。和泉式部伝説がこのように全国的規模で流布していった伝播の軌跡は、はやく柳田国男氏によって明らかにされている。和泉式部伝説の唱道者・伝播者を泉や川などの水辺で宗教行為をしながら回国遊行した巫女・歌比丘尼とみなし、発祥地は三河国の鳳来寺の峯薬師で、すべて京都の誓願寺が本元であった[8]とされた。折口信夫先生も柳田説をうけ、そうした比丘尼たちが生業のために歌占や色をひさぐ仕事もした。「そういふ旅行する宗教家のした事が（非常に浮気つぽい人だといふ）和泉式部の履歴の中へ這入つて来[9]」ている。和泉式部の一千五百余首の歌のなかにも、彼女の実作ではない巫女たちの伝承歌の竄入があるはずである。今後こうした視点からの解析は、なかなか困

難な仕事ではあるが、和泉式部研究には不可欠なことであろう。

注

（1）吉田幸一氏「和泉式部」『王朝の歌人』（和歌文学講座六、桜楓社、昭和四十五年）二五七頁

（2）「和泉式部―黒髪の……」「〈相聞」第二十八号、平成十七年十二月）

（3）「和泉式部と小式部」（日本伝説叢書『播磨の巻』大正七年、すばる書房、昭和五十五年）二二七～九頁

（4）「和泉式部の事蹟と伝説」『宮廷女流日記文学』（至文堂、昭和二年、昭和四十年）。藤沢論文とほぼ同じで、一五のみカットされている。一五に所載文献名があげられていなかったためであろうか。

（5）「和泉式部の晩年」（「国語国文の研究」第二十号、昭和五十三年五月）

（6）「和泉式部の終焉と墳墓についての伝説地―その古蹟を尋ねて―」（「平安文学研究」第三十五輯、昭和四十年十一月）

（7）「山陽史話」第一輯、昭和四十五年二月、山陽町教育委員会

（8）「和泉式部の足袋」『桃太郎の誕生』（三省堂、昭和八年、『定本柳田国男集』第八巻、筑摩書房、昭和三十七年、『柳田国男全集』第六巻、筑摩書房、平成十年）。同じ定本・全集に収める『女性と民間伝承』も参照。

（9）「和泉式部」『日本文学史ノート』Ⅱ（中央公論、昭和三十二年、『折口信夫全集ノート編』第四巻、中央公論社、昭和四十六年）四六〇～一頁